

症例報告

当科において経験した若年者大腸癌の一症例

林 芳和 岡本 聡 横浜 吏郎 稲場 守
 谷 光憲 福良 徹宏* 西山 徹* 久保田 宏*

はじめに

若年者の大腸癌は非常に稀で、29歳以下の症例は全大腸癌の1.2～5.6%¹⁾³⁾といわれている。当科において17歳の直腸癌を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：17歳女性。

主 訴：下腹部痛、肛門部痛、下痢。

現病歴：平成8年8月頃より、排便時下腹部痛、性交時肛門部痛、下痢を自覚した。症状に改善傾向なく同年12月に近医受診し、便潜血陽性のため同年12月26日当科紹介受診。9年1月8日大腸内視鏡にて直腸に腫瘍を認め、同日精査及び加療のため当科入院となった。

既往歴：特記事項無し。

家族歴：大腸癌の家族歴はない。

現 症：下腹部圧迫時、同部に不快感を認めた。

入院時血液検査所見：血液検査上、白血球およびCA19-9の有意な上昇を認める以外に明らかな異常所見は認めなかった。

Key Words：若年者、大腸癌

A case of juvenile colon cancer

Yoshikazu Hayashi, Satoshi Okamoto,
 Shiro Yokohama, Mamoru Inaba, Mitsunori Tani,
 Yoshihiro Fukura, Toru Nishiyama*, Hiroshi Kubota*

Department of Gastroenterology, Department of
 Surgery*, Nayoro City Hospital

名寄市立総合病院 消化器内科, 外科*

下部消化管造影：RaからRbに長さ3cmにわたる全周性の狭窄を認めた(図1)。

大腸内視鏡所見：RaからRbに全周性に狭窄した2型の腫瘍を認めた(図2)。生検組織はpoorly differentiated adenocarcinomaであった。

骨盤部CT検査：直腸に腫瘍を認めた。周囲リンパ節の腫大は認めなかった。

腹部CT検査：明らかな遠隔転移は認めなかった。

以上の結果より、大腸癌、Rab', 2型', A2', N'(-), P0', H0', M'(-), Stage II'と診断した。平成10年1月31日、当院 外科にて低位前方切除術および術中に左卵巣転移を疑う所見を認めたため、同時に左の卵巣も切除した。またこの時ダグラス窩に腹膜播種を疑う所見を認めた。本来であればMile's opeの適応であったが、家族の同意が得られず施行できなかった。

切除標本：Rabに全周性の3型の腫瘍を認めた。径は45×35mm(最大径55mm) SE N1 P1 H0 Stage IV OW(-) AW(-) EW(-)であった(図3)。病理診断の結果では、Moderately differentiated tubular adenocarcinoma, ly3 a2 v1 n1(+) n2(-) p0 Stage IIIa ow(-) aw(-) ew(-)、卵巣はcorpus luteum cyst (meta(-))であった。

術後は化学療法を患者の家族に勧めたが、同意を得ることができず、経過観察することになった。97年7月には右卵巣転移と卵巣破裂による腹水を認め、右の卵巣摘出も検討したが、家族から同意を得ることはできなかったため、疼痛コントロールを主体とした対症療法を行ったが、翌年98年7月、外泊中に自宅で嘔吐後、誤嚥による呼吸不全にて永眠された。



図 1

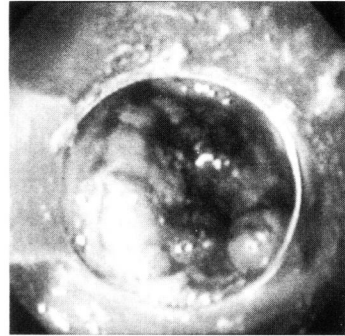


図 2

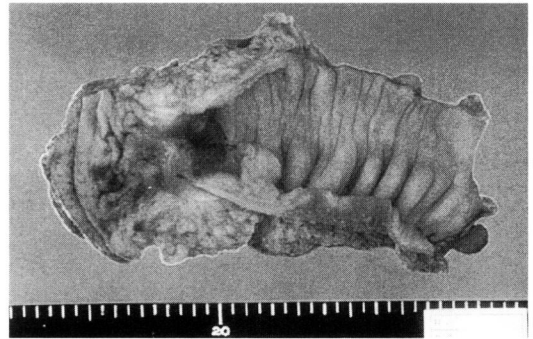


図 3

考 察

若年者大腸癌の定義は、一般に 39 歳以下といわれており⁴⁾⁵⁾、その病理組織学的特徴としては、粘液癌及び低分化腺癌が高頻度を占め¹⁾⁶⁾、その比率は非若年者の 4.3~4.7 倍とされている⁷⁾。また進行癌症例が多く、転移や脈管侵襲が高度なことが特徴である⁷⁾。しかし、治癒切除できた場合の予後は、非若年者のそれと差がないとする報告が多い⁸⁾⁹⁾。若年者の大腸癌は非常に稀で、29 歳以下の発生頻度は本邦では 1.2~5.6%¹⁾³⁾といわれており、頻度の少なさから若年者に対して定期検診を実施しがたいのが現状である。そのため、残念ながら診断が遅れ、進行癌として発見される症例が多い。若年者といえども、血便、腹痛、肛門痛、イレウス症状等を認めた場合は、大腸癌の存在を念頭におき、早期に下部消化管内視鏡検査を施行すべきである。

文 献

- 1) 山田 肅ほか：若年者の下部消化管癌—若年者大腸癌—。胃と腸 7：881、1972。
- 2) 越智敬善ほか：Cancer Family Syndrome の一例を含む若年者大腸癌の臨床病理学的検討。癌の臨 33：386、1987。
- 3) 中川英刀ほか：30 未満の若年者大腸癌の検討。日臨外医会誌 57：528、1996。
- 4) 加藤知行ほか：若年者の大腸癌。外科 40：802、1978。
- 5) 金井道夫ほか：年齢別にみた直腸癌手術例の検討—若年者直腸癌を中心に—。日消外会誌 18：799、1985。
- 6) 弥政普輔ほか：大腸粘液癌の臨床病理学的検討。日消外会誌 21：75、1988。
- 7) 西田 修ほか：若年者大腸癌の病態および治療成績。日消外会誌 17：178、1984。
- 8) 吉雄敏文ほか：若年者における大腸癌の治療。大腸癌の臨床、へるす出版、東京、566～574 頁、1984。
- 9) 正木忠彦ほか：若年者大腸癌の診断と治療。日本大腸肛門病会誌 41：524、1988。